

# うみと水(ぞく)

Suma  
Aqualife Park  
in KOBE

もっと知ってスマスイ

2021

3

March



特集

SPECIAL ISSUE

## 「スマスイ」へつながる 神戸の水族館の歴史



新たな水族館が描くビジョン

— 須磨海浜水族園・海浜公園再整備事業について —

須磨海浜水族園は須磨海浜公園の再整備に伴い、2023  
そこで、今号では神戸の水族館の歴史を振り返ると

特集  
SPECIAL ISSUE

# 「スマスイ」へつながる

飼育支配人兼魚類展示課長  
馬場宏治

福岡県生まれ。1995年4月、震災後の須磨海浜水族園に採用。イルカ、魚類、研究教育、施設部署を歴任し、2020年4月、飼育支配人兼魚類展示課長に就任。

これまでもさまざまな場面で「神戸が日本の水族館発祥の地であり、スマスイはその流  
これはどうしてでしょうか。私自身も気になっていたことだったので、できるだけ情報を

## 和楽園の水族放養場

国内の産業振興を図ることを目的として開催された「内国勸業博覧会」、その第4回が1895(明治28)年4月1日～7月31日に京都で開かれた際、神戸市もこれに協力し、サテライト会場の施設として、和田岬にあった遊園地「和楽園」に水族放養場を開設しました。京都会場では淡水魚のみの観覧で、海に近い和田岬では海水魚の展示が行われたということ

です。和楽園の水族放養場は水族を展示する「陳列場」と、海から海水を引き込んだ「放養池」から成り、そこでも魚を泳がせていたようです。

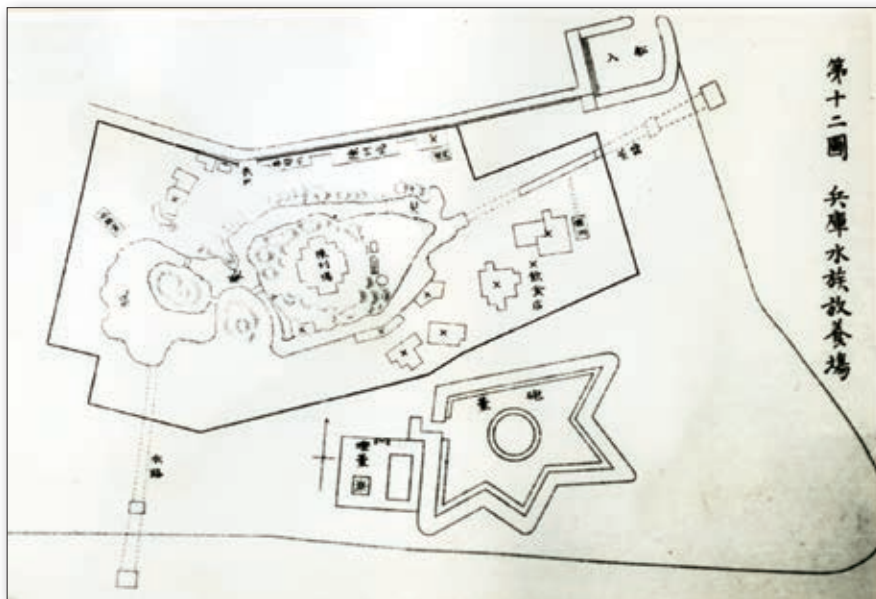
作家のラフカディオ・ハーン(小泉八雲)も国内旅行中に会場を訪れ、当時の様子を著書「KOKORO」(1896年)に記していますので、抜き出して紹介します(以下、日本語訳書籍より原文の通り)。

四月二十三日 神戸にて

きょうは、兵庫の海岸に近い庭園で開催されている、魚介その他の水産物の

展覧会を見物してきた。場所の名前は「和楽園」という。「平和の楽しみ庭」という意味である。むかしふうの見晴らしの庭みたいにできたところで、いかにもその名にふさわしいところだ。庭園のはしからは広い湾が見え、小舟にのった漁師や、日に輝きながら沖をすべってゆく白帆の影や、そのはるかかなたには、屏風のように水平線をかぎりながら、紫いろにうす霞む山々の秀が、美しく空にぬきんでいるのが見える。

澄明な海の水をたたえた、おもしろい形をした池がいくつもあって、そこに色とりどりの美しい魚がおよいでいた。わたくしは水族館へもはいつてみた。そこには風変わりな魚類



平面図(星形は和田岬砲台跡)



陳列場

\*1…ラフカディオ・ハーン(平井呈一訳)「心 日本の内面生活の暗示と影響」(岩波文庫、1951年)

年に閉園し、2024年にリニューアルオープンします。  
ともに、新たな水族館のコンセプトを紹介します。

「うみと水ぞく」は今号で一時休刊し、  
次号は2024年に発行予定です。

# 神戸の水族館の歴史

れをくむ水族館」と紹介してきましたが、  
集めて、もう一度整理して残してみようと思立ちました。

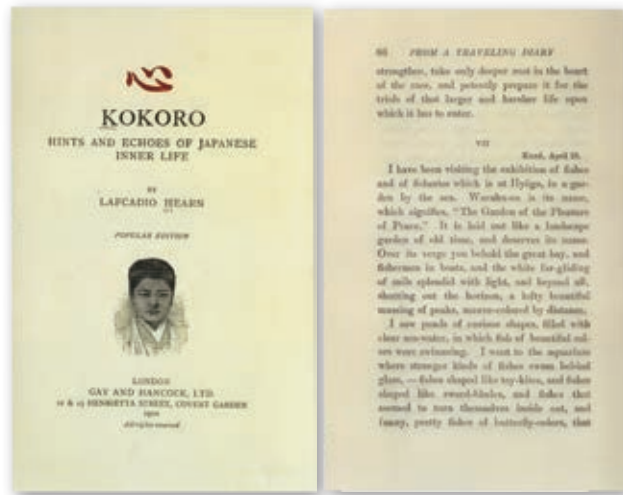
が、ガラスの向こうにおよいでいた。一紙鳶しんのような形をしたの、刀のようなかっこうをしたの、裏返しになったようなの、袖ひれのような鱗うろこをひらひら動かしながら、舞妓のようにおよいでいる、揚げ羽色のきれいなおもしろい魚などがいた。

小舟、網、釣針、浮子、夜間魚をとるために用いるいさり火など、いろいろの様式を模型にしたものも、わたくしは見た。さまざまな種類の漁撈ぎょうろうの絵図や、捕鯨の模型や絵図も見た。(略)\*1

いかがでしょう。当時の平面図と照らすと、「ああこの池か」などと想像をかき立てられます。しかも、海と配管を直接つないだ池に「色とりどりの美しい魚」が泳いでいたとは！陳列場内でも「紙鳶しん」のような形をした魚(エイでしょうか)、刀のようなかっこうをした魚(タチウオ?)、裏返しになったような魚(何でしょう。カレイやヒラメ?)、袖ひれのようなひれをひらひら動かしながら、舞妓のように泳ぐ魚(私はホウボウだと思いますが…)、アゲハチョウ色の魚などは想像もできません。125年前の水槽にも多種多様な魚がいたことがうかがえます。4カ月の博覧会の会期が終了しても、放養池や陳列場は残されることになったそうです。

## 和田岬水族館

それから2年後の1897(明治30)年、「第二回大日本水産博覧会」が神戸で開催されました。神戸市は和楽園の水族放養場内にあった陳列場を「標本陳列館」とし、放養池のほとりに「水族館」を建設しました。これが「和田岬水族館」です。当時の水族館のことが詳細に記載されている「第二回水産博覧会附属水族館報告」から紹介します。



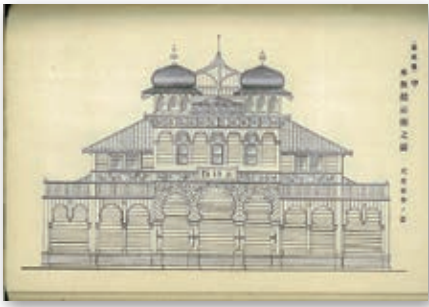
ラファディオ・ハーン(小泉八雲)の原著\*2

\*2...Lafcadio Hearn「KOKORO: HINTS AND ECHOES OF JAPANESE INNER LIFE」(Boston: Houghton Mifflin, 1896)

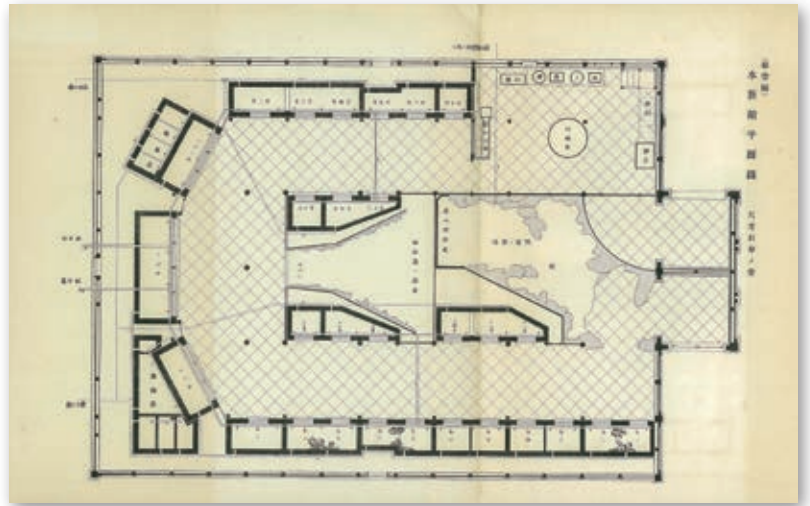
\*3~\*10...「第二回水産博覧会附属水族館報告」(提供:国立研究開発法人 水産研究・教育機構)

会場図(放養場の平面図とは南北が逆)\*3

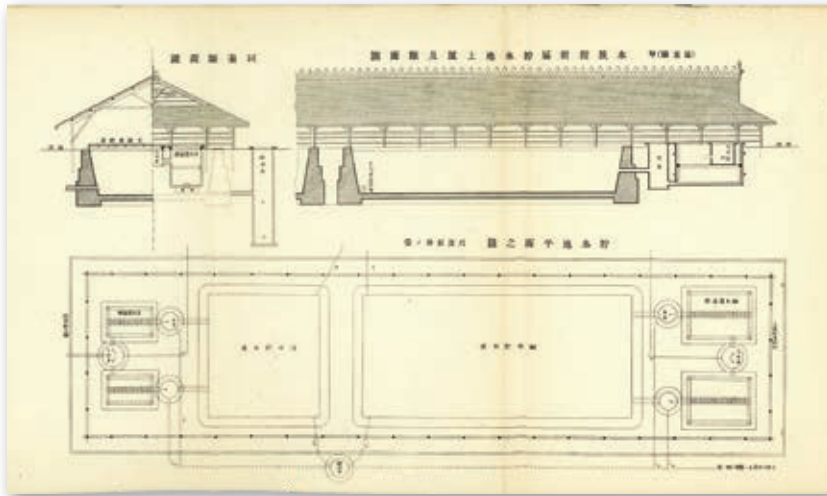




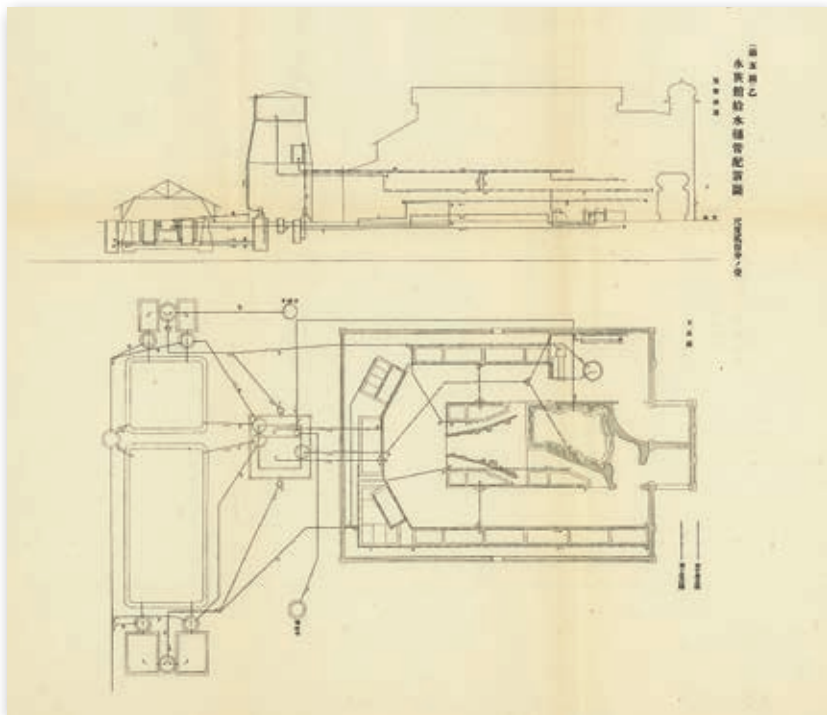
和田岬水族館外観\*4



館内平面図\*5



貯水施設図面\*6



水族館給水樋管配置図(配管図)\*7

インドの建築様式を意識した外観は、「日本の水族館の父」とも呼ばれる旧東京帝国大学理学部教授の飯島魁<sup>いさお</sup>の設計によるもの。大小30余りの展示水槽があり、館内平面図の中央部には「海底ノ模造景」「岩洞ノ模造」といった記載があることから、当時でもジオラマ風の展示がなされていたことがうかがえます。水族館建物のそばには淡水・海水の濾過槽と貯水槽を備えた建物があり、「水族館給水樋管配置図」からも、後の本格的な水族館の設備を備えつつあったことがわかります。これが、和田岬水族館が日本で最初の本格的設備を持つ、水族館と名乗る施設のルーツといわれるゆえんです。

さて、肝心の展示生物はどうだったのでしょうか。

「第一號水槽」のイセエビに始まり、主として瀬戸内海で取れる魚介類を展示していたようです。中には、ヒラメやコチとクルマエビを同居させるなど「この水槽大丈夫か?」と思わせるものも見受けられます(第一號イセエビ水槽にクルマエビを同居させていたところ夜間に度タイセエビに食べられていたため、他の水槽に移した、と備考に記載がありますが、その水槽にはヒラメやコチが…)。

また、イソギンチャク、イソバナ、ウミウチワ、イボヤギといったサンゴの仲間たちを展示しているのは、魚類やウミガメなど、わかり

やすい生物以外にも展示を考慮していたと考えられます。

さらに同報告には、開催期間である3カ月分の天候、風力、風向、気温(1日3回)、海水温(1日3回)、比重、淡水温(1日3

回)や、期間中の死亡生物の記録と原因など、飼育日報としての基礎情報もしっかり記録されています。

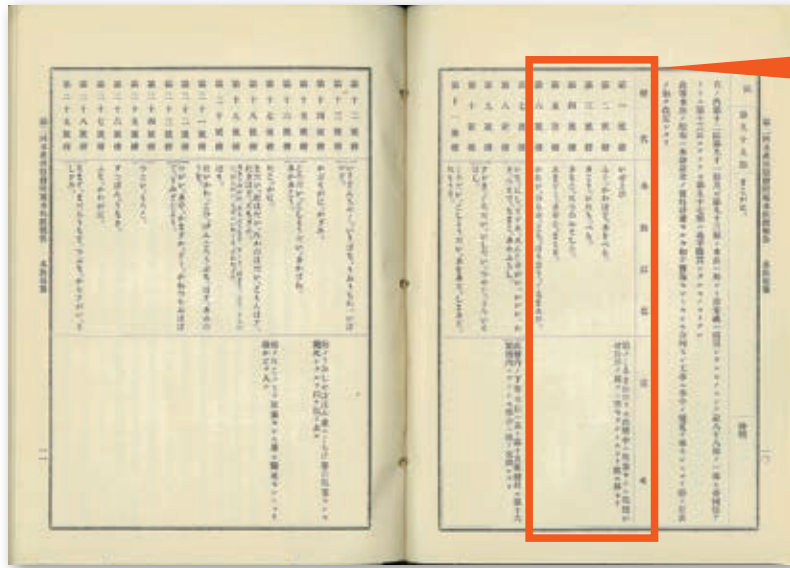
この水産博覧会は9月から11月の開催期間を終えた後も施設はそのまま残され、5年後の1902(明治35)年4月に湊川神社の敷地内へそっくり移設。「楠公さんの水族館」と呼ばれ市民に親しまれましたが、1910(明治43)年2月に閉館しました。



館内図\*8



和田岬水族館外観写真\*9



水槽ごとの展示生物の記録\*10

槽名	水族品名	備考
第一號槽	いせえび	始メくるまわびつを此槽中ニ設置セシニ夜間いせびノ爲メニ密セラレ、ニシテ他ニ移セズ
第二號槽	ふぐ、かわはぎ、あをべち	
第三號槽	あこう、いたち、べら	
第四號槽	あなご、たつのおとしご	
第五號槽	あまご、あまご、あまご	
第六號槽	かれい、からめ、ごころ、ほうぼう、あまご	

## 湊川水族館

和田岬水族館から33年後の1930(昭和5)年、神戸港にて執り行われる海軍の観艦式に合わせて「観艦式記念海港博覧会」が神戸市主催で開催されました。この時、第二会場となった湊川公園に、神戸市水産会の主導により建設されたのが「湊川水族館」です。

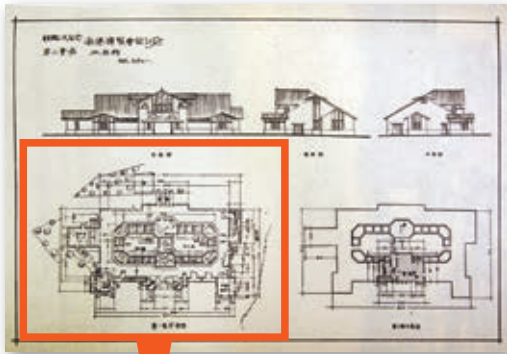
第二会場の様子を当時の新聞記事は「神戸市随一の盛り



海港博覧会会場図



第二会場拡大図(右上に特設水族館とある)

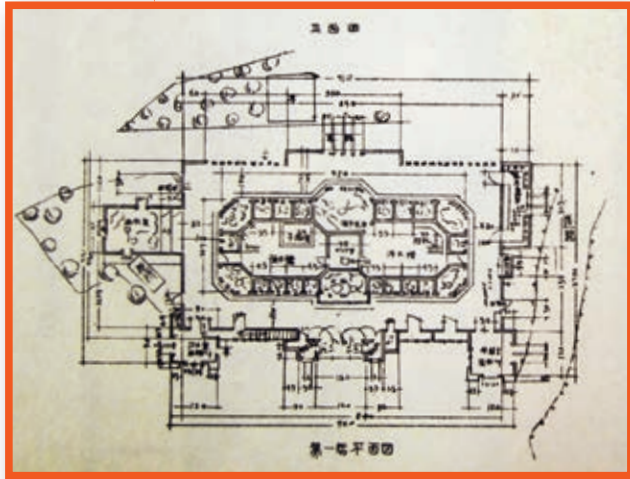


内部平面図



湊川水族館外観写真

場新開地に隣り合っ  
てゐるだけに餘興に  
も随分面白いもの  
がある、藝者の手踊り、  
海女の鮑取りなど  
艶ッぱい。こゝは水産  
館、海洋館、水族館  
の三つが設けられて



魚の棲息状態から漁業に關する總てを見せ、海洋の神  
秘、一萬種からの貝類の陳列、氣象學上の奇現象など誰  
にでもわかるやう仕組まれ電飾燈スカイ・サインなどで景氣  
を添へてゐる。」と伝えています。\*11

内部平面図を見ると、入館して正面から左右に分かれ、口  
の字型に観覧通路が設けられています。来館者はぐると順  
路を回って、元に戻ってくるようになっており、バックヤードは  
展示水槽に囲まれていて、開館中でもスタッフが作業しやす  
そうに見えます。

どのような生物を展示していたのかは、詳しい記録が見つ  
からなかったため不明です。

湊川水族館は太平洋戦争の激化による影響を受け、1943  
(昭和18)年2月に閉館せざるを得ない状況になりました。そ  
して、終戦まであと5カ月という1945(昭和20)年3月の神戸  
大空襲で焼失してしまいます。

\*11…神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫・大  
阪朝日新聞 07.博覧会及商品陳列所(05-116)

## 須磨水族館

終戦から12年後の1957(昭和32)年に神戸市立として「須  
磨水族館」(以下、旧水族館)が誕生しました。  
当時は目の前の国道2号に路面電車が走っ  
ており、そのつながりもあって、神戸市交通局  
の管轄となっていました。旧水族館から現須  
磨海浜水族園について、詳しくは2017(平成  
29)年に発行した60周年記念誌に譲りませ  
が、国際港湾都市神戸にふさわしい水族館  
が要望され、開業に至っています。

当時をご存じのお客さまからは「建物に  
入ったらすぐにウミガメの水槽があって…」  
と必ず言われるので、それだけ印象深い展  
示だったのだと教えられます。実はそのウミ  
ガメ水槽の上には、イルカライブ館の標本展  
示室に展示してあったシャチの全身骨格が  
つり下げられていたのです。

また、旧水族館時代の資料を読み解くと、



旧水族館前を走る路面電車



開業当日の館内



ウミガメ水槽



旧水族館空撮

神戸港へ入港した外国航路の船から、さまざまな生物の寄贈を受けた記録が見つかります。現地で船員さんが購入したもの、釣り上げたもの、中には船の浴槽で飼育されながら、遠路はるばる、東南アジア、米国、アフリカなど世界各地の生きものが集まってきたのは、まさに神戸らしいことだと思います。この頃は今ほど野生生物保護や規制が厳しくなく、古き良き時代の出来事の一つでもあるのではないのでしょうか。

国際都市神戸に立地する水族館のもう一つの特徴として、姉妹都市提携の外国諸都市から生物の寄贈や交換を行ったことも挙げられます。現水族園で展示しているオーストラリアハイギョ(オーストラリア)、チョウザメ類(当時はソビエト)、パイユ(中国)などがそれです。

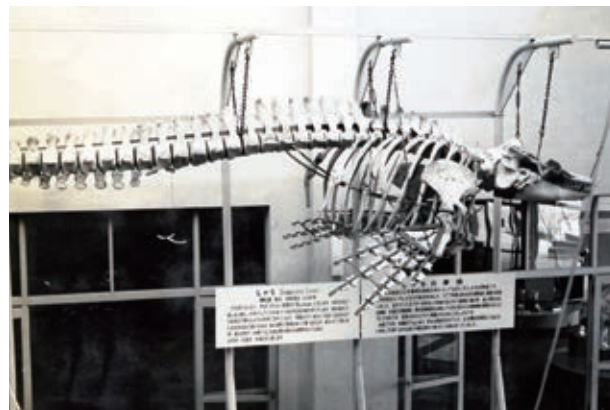
1958(昭和33)年には文部省(当時)から博物館相当施設の指定を受け、積極的な社会教育活動を始めたのは、水族館は見世物だけでなく社会教育も担う場であるべきだという、先見の明があったからだと思います。「水族館科学教室」と銘打って、小学校などと連携してプログラムを作っていたそうです。

飼育スタッフは日々の飼育業務や社会教育活動の傍らで、調査や研究といったものにも手を抜かず、「東の上野(動物園)、西の須磨(水族館)」といわれるほど、アカデミックな水族館だったと聞いています。この頃のスタッフから後に大学教授となる方々を輩出していることなども、その一端を示しているといえるでしょう。

## 須磨海浜水族園

開館から30年近くが経過し、施設の老朽化が進んだ旧水族館を完全にリニューアルして1987(昭和62)年にオープンしたのが現在の須磨海浜水族園(以下、水族園)です。生きものの「生きざま」をメインコンセプトとし、誕生した水族園は、大型水族館ブームの先駆けとして、当時は東洋一とうたわれた水量1,200トンの「波の大水槽」を有する三角屋根の本館をはじめ、幾つかの建物に分かれた分棟型水族館で、大小100余りの展示水槽を備えていました。

「汽車窓式」と呼ばれる展示水槽には「生きざま」に沿い、「身を守る」「食べる」「子孫を残す」などの生物の生態に合わせた展示テーマを全てに貫き、今



シャチの骨格標本



布に巻かれて到着したオーストラリアハイギョ



教材用の画像撮影



水族館科学教室



国内初のロングノーズガー繁殖(1977年)



波の大水槽(波の高さに注目)



旧水族館と新水族園のツーショット



オープン時のイルカライブ館



オープン時のラッコ館



アジアアロワナの親子



ケツギョのふ化仔(し)魚

では主流となっている「生息環境ごと」の展示とは一線を画しています。私が魚類の担当だった頃は展示生物を変更しようとする、必ず上司から「水槽のテーマ」に合致した生物であること、もしくは「何らかの生態テーマ」を考案することを絶対条件として示されました。それに合わせて、展示生物の入手難易度や飼育難易度などを考慮すると、なかなか高いハードルでもありました。

水族園のオープンに伴い、旧水族館を所管していた神戸市交通局から、外郭団体である(財)神戸国際観光協会(現(一財)神戸観光局)へ運営を委託され、神戸観光の中核施設としての位置付けがより強調されることとなりました。

イルカやラッコといった人気生物の導入もあり、開園から2年目には入園者が500万人を超えるなど、神戸市民を中心とした期待の大きさがうかがえます。調査や研究といった面でもアジアアロワナの国内初繁殖や、中国から寄贈されたケツギョの繁殖から明らかになった、生まれた時から魚の稚魚しか食べない特異な習性は、後の特定外来種指定へとつながっています。

水族園にとって忘れていけないのは、阪神・淡路大震災でしょう。1995(平成7)年1月17日に発生した地震により、水族園も大きなダメージを受けました。建物や水槽などは、“大震災”のイメージほどの被害を受けてはいませんでした。停電や断水といったライフラインの遮断により、主に魚類を中心に飼育生物の半数以上を失う結果となりました。

実は、私が水族園にイルカトレーナーとして採用され、初めて神戸にやってきたのはこの年です。4月1日からの勤務では、波の大水槽をはじめとして、多くの水槽が水もなく空っぽだったのを今でも覚えています。さかなライブ館で避難生活をされている方々が洗濯物を干し、レストランでは近くの中学校が授業を行っていました。被災から約3カ月後の4月20日に営業を再開することができたのは、スタッフの必死の努力もありましたが、多くの水族館からの多大な支援があつてのことでした。

そしてもう一つ、水族園にとって後に大きな節目を迎えることとなる指定管理者制度が、2006(平成18)年度より導入されました。指定管理者制度は公的施設の運営を民間事業者へ委託する制度で、神戸市の場合は4年ごとに運営希望事業者によるコンペを行います。1期目の指定管理者はこれまでの外郭団体が運営委託を受けることになりましたが、2010(平



波の大水槽での死魚の回収



がれき置き場となった第一駐車場



成22)年度の2期目以降は民間事業者に運営が委託されました。この時点からが、実質的な「公設民営」の始まりです。

その後の12年余りが読者の方々の記憶に新しい「スマスイ」ではないかと思えます。外来種問題啓発のため、ミシシッピアカミミガメの受け入れ施設として「亀楽園」をオープンし、また、イルカやアザラシ、ペンギンといった動物とのふれあい体験、夏期に須磨海岸でイルカを泳がせた「須磨ドルフィンコースト」など、次々と新しいことにチャレンジしていく水族館へと変化していきます。展示活動も園内だけにとどまらず、他団体イベントへの生体出展や、百貨店からの依頼を受けて夏休み特別催事で水族館の準備・運営等を手掛けるなど、外部業務の委託を受けたのも取り組みの一つでした。さらに、

ただ集客に走るだけでなく、学術分野の啓発普及への取り組みとして、生物学の分野で世界的に顕著な業績を残した研究者へ授賞する「神戸賞」の創設、最新の生物学を広く知ってもらうための「サイエンスカフェ」、身近な自然環境に目を向けて活動する個人・団体への「スマスイ自然環境保全助成制度」「須磨海岸での里海活動」など、従来の水族館の枠にとらわれない活動を展開していったのです。内部にいた者として、この12年余りは刺激的でもあり、大変でもあり、本当にあつという間でした。しかしながら、来園者の方々には「スマスイ元気だね」「いつ来ても、何か違う発見がある」といったお声を頂いたのは、その時の全てのスタッフの功績だと思います。

そんなスマスイでしたが、飼育設備など、機械や施設の老朽化による劣化はあちらこちらで進んでいました。これまでもフルリニューアルの話が浮かんでは消えていましたが、いよいよその話が「須磨海浜公園再整備計画」として、現実のものとなってきたのです。

再整備計画はスマスイだけでなく、海浜公園全体の再整備と運営を民間事業者へ委託する大掛かりなものです。そのためのコンペが行われ、新たな事業者が決定しました。この事業者が2020(令和2)年度より指定管理を受け、再整備計画の推進とスマスイの「幕引き」を、魅力の維持に最大限の配慮をしながら一体的に進めていき、その先にある2024(令和6)年開業予定の新たな「神戸の水族館」の運営をすることになります。



近隣中学校の授業



亀楽園



生きものとのふれあい体験



神戸賞授賞記念講演会



大水槽前でのサイエンスカフェ

# 新たな水族館

総支配人兼園長 中垣内 浩 神戸市生まれ、西宮市育ち。2018年6月から鴨川シーワールドの総支配人を務め、2020年4月、須磨海浜水族園総支配人兼園長に就任。



リニューアル後の外観イメージ(提案時のものであり、変更の可能性があります)

## 一 須磨海浜水族園・海浜公

**神** 戸市立須磨海浜水族園(以下、水族園)は、1957年に須磨水族館として開館し、1987年に水族園としてリニューアルした後も、市民の教養とリクリエーションの場として大きな役割を果たしてきました。

水族園では従来の水族館機能にとどまらず、大阪湾・瀬戸内海を中心とした生物の生態や環境に関する調査研究、観光客の多様なニーズに対応したサービスの導入、水族園を拠点とした地域活性化など、指定管理者制度を活用した民間事業者ならではの工夫などで、魅力ある事業展開がなされてきました。開園から30年以上がたつ現在でも年間110万人もの来園者数がある(新型コロナウイルス感染症の発生以前)施設である一方で、設備をはじめとする老朽化が進んでおり、今後これまで以上の集客を図るためには、抜本的な再整備による魅力向上が必要となってきました。施設の所有者である神戸市が、2017年度の都市公園法改正により創設されたPark-PFI制度を活用し、民間の資金とノウハウを生かした水族園および海浜公園の再整備を行うことを決定。公募により民間事業者から再整備やその後の管理についての事業提案を求め、総合的な評価に基づいて再整備を実施する民間事業者を決める運びとなりました。

今般、その公募について株式会社サンケイビルをはじめ7社の共同事業者(グループ名:「神戸須磨Parks + Resorts共同

事業者」)が応募し、優先交渉権を獲得し、2019年12月に公募設置等の計画を認定いただきました。そして、共同事業者の一社である株式会社グランビスタ ホテル&リゾートが現水族園の指定管理業務および新たな水族館の運営を担うことも決定いたしました。

再整備後は、公園全体で地域コミュニティ(公園)と観光(リゾート)が共存・融合することを事業コンセプトとしており、コミュニティと観光客が交流する「つながる」海浜リゾートパークをつくります。新たな水族館もこの事業コンセプトを前提に、公園全体の中でもデスティネーションリゾートの核となる施設づくりを目指します。また、社会に対する水族館の役割は①リクリエーション ②教育 ③保全 ④調査・研究の四つであり、それぞれのバランスで水族館の特性が決まります。新しい水族館では、さまざまな社会情勢を踏まえ、四つの役割を包括する「飼育生物の福祉」の考えを拡充した上で、各役割を本事業でしか実現できない次のステップへと進化させます。

前身の須磨水族館時代を経て、60年もの間、大都市神戸で市民に親しまれてきた須磨海浜水族園と、郊外立地ながら、世界的にも希少な海獣類をメインに据えた展示で、民間水族館事業者として50年の安定した運営実績を持つ鴨川シーワールド。二つの水族館のそれぞれ半世紀に及ぶ歴史を踏まえ、相互の協力体制を構築することによって、時代に合わせた新しい

# が 描 く ビ ジ ャ ン



## 園 再 整 備 事 業 に つ い て

世界水準の水族館の在り方を示すモデルとして生まれ変わります。

新しい水族館のコンセプトは「つながるエデュテインメント水族館」であり、利用されるお客さまに楽しんで学んでいただく場の提供はもちろん、「地域・未来・公園・生命・世界」とつながりを持つ水族館でありたいと考えています。

新たな水族館の施設構成としては、下記の三つの施設で構成することになります。

一つ目は「オルカスタジアム」という、シャチを飼育・展示する施設です。日本でも数少ないダイナミックなシャチのパフォーマンスをはじめ、シャチの生態などが学べる世界初の「オルカラボ」や、各種教育プログラムを実施する「オルカホール」を有しています。普段は触れられない生きものの生態を理解することで、生物や自然環境に広く関心を持ってもらうこと、ひいてはこのことが自然保護の行動につながるものであり、自然保護を啓発する使命を果たすことも目的としております。また、鯨類の繁殖に関する研究を推進する「神戸保全繁殖センター」も設置いたします。

二つ目は「イルカスタジアム」という、イルカを飼育・展示する施設です。この施設はイルカのパフォーマンスをはじめ、間近でイルカを観察できる「イルカホール」、イルカと触れ合える「イルカビーチ」を有しています。「オルカスタジアム」および「イルカス

タジアム」とも動物福祉の観点を重要視し、メインプールに加え、サブプール、プリーディングプール、メディカルプールも備え、プールの水量についても世界基準の施設構成となります。

三つ目は「アクアライブ」という、魚類や、アシカ・アザラシなどの海獣類、ペンギンといった鳥類、ウミガメなどを飼育・展示する施設です。「水の一生」をテーマとして六甲山系や瀬戸内海の生物を展示するエリアや、サンゴ環礁などを展示するエリア、砂・岩・植栽などの生息環境を再現し、海獣類やペンギンなどがのんびりとたたずんだり、水中でシャープな動きをしたりと、多様で豊かな行動を見ることが出来るエリアで構成される施設となります。

また、「アクアライブ」の中には、歴史ある水族園でこれまで展示してきたゆかりのある生物が見られる「須磨コレクション」があり、このエリアは公園に開かれた、無料で観覧できるエリアとなる予定です。

そのほかにも、地産地消にこだわったレストランやショップなどの飲食および物販施設も複数あり、ゆったりとくつろげる「海に見える丘広場」など、快適に過ごしていただける空間づくりを計画しています。

計画については、現在、詳細を検討しています。内容が決まりましたら別の機会でぜひ皆さまにお知らせできればと思いますので、期待してください。

※各施設名は仮称です



Suma  
Aqualife Park  
in KOBE

●**入園料金改定について** 2021年3月1日(月)から本館のみ営業のため、正規入園料を変更します。

入園料 ▶ 大人…700円 中人…400円 小人…300円

年間パスポート ▶ 大人…1,800円 中人…1,200円 小人…700円

※大人(18歳以上)、中人(15歳～17歳)、小人(小・中学生)。未就学児は無料です

※上記の価格は全て税込み価格です

●営業日・時間はホームページで随時ご確認ください

●新型コロナウイルス感染防止の取り組みを徹底して営業しています。入園の際はマスクの着用、検温、手指の消毒にご協力をお願いします

●社会情勢等の変化に伴い、上記内容を変更する場合があります

スマスイ

検索

<https://kobe-sumasui.jp/>